

題目	南満州鉄道株式会社		
氏名	三輪 政宗	(学籍番号 170781097)	指導教員 稲葉千晴

はじめに

近年、中国は高速鉄道網を急速に拡大しており、中国全土に広がっている。この鉄道網は戦前、日本が設立した南満州鉄道がその礎となっており、現代中国でもその当時の遺産の再評価がされている。本稿では南満州鉄道株式会社（以下、満鉄）の歴史をたどりながら評価していく。

第1章 満鉄の設立

ロシアは1903年1月、哈爾濱から大連まで東清鉄道南部支線を敷設・開通させた。1905年9月の日露戦争の講和条約により南部支線の長春～大連・旅順と付属する炭鉱や鉄鉱山などが日本に譲渡された。1906年6月に満鉄は発足し、1907年に正式に営業を開始した。満鉄は鉄道路線だけではなく、付属の炭鉱や鉄鉱山の経営や付属地での行政も担当し、大連市内のまちづくりやホテルの経営、高等教育にも力を入れていた。これにより、満鉄はのちに大きく発展するのである。

第2章 満州事変までの満鉄の隆盛

アメリカは1908年から鉄道中立化にこだわり、各国に満洲の鉄道路線を国際管理下に置く提案を行っていた。しかし、日ロ両国から反発にあい、かえって、日ロ緊密化をまねいてしまった。この時期の満鉄は枝線の計画、開通による輸送量の増加で収入を順調に伸ばし、1907年の設立から1913年には利益は約三倍に拡大した。1917年のロシア革命時には、ロシアにおいて調査部が資料収集活動を行った。1928年には張作霖の日本側の期待と実際の反応のギャップから爆殺事件が発生し、満鉄の路線が爆破された。

第3章 満州国と満鉄

1931年9月、満州事変が勃発した。満鉄は本線を爆破されながらも、関東軍に協力し、軍の兵站を支えた。事変発生時は冬の時期であり、零下30度、風速50mという過酷な環境の中、延べ距離400万キロメートルを輸送した。満洲国建国においてはその調査力を活かし、満洲国の経済政策策定に寄与した。1933年、満洲国から国有鉄道の経営を受託した。これにより、旅客輸送が飛躍的に発展し、急行列車の本数増加や満鉄初の特別急行列車の運行が開始された。

第4章 第二次世界大戦・ソ連侵攻と満鉄

1937年、日中戦争が勃発した。満鉄は線路修復のための人員派遣、軍用列車の運行を行った。また、占領地における鉄道の管理も満鉄が行っており、のちに子会社である華北交通が設立、管理が移管されるまで続いた。1939年5月、ノモンハン事件が勃発した。その時も満鉄は軍事輸送の支援を行った。戦時体制下においては対ソ戦を意識した対策が行われ、速やかに軍事輸送ができるよう、広軌運転の研究が行われた。実際にソ連国境に接する機関区では、12両の機関車があらかじめ広軌に改軌された、貨車・機関車の改軌施設もつくられた。1945年8月、ソ連が満洲に侵攻をはじめた。満鉄は軍事輸送だけではなく、居留民の疎開輸送も行った。終戦後、1945年9月30日、満鉄は消滅した。

終章

満鉄には大日本帝国政府により満洲経営のために設立された国策会社の面と株式会社の面がある。特にホテル事業や都市再開発事業など多角経営という点においては現代のJRなどの旅客鉄道会社と共通点があり、先進的な鉄道会社であり、純粋な利栄追求型の株式会社であると考えられる。このような先進的な会社が戦前に中国大陸にあったことを語り継いでいきたい。